

圖 版 解 說

一、——四、 大安寺襖繪

五、 湛慶作 千手觀音像

八、 一丘筆 人物像

(以上論文參照)

六、 筆者不詳 妙然像

東京 脇本十九郎氏藏

掛幅 紙本着色 竪 六六浬 横 三三浬

上疊に坐せる婦人の肖像を描き、向つて右方に

郭波斯迦妙然壽位

上部より左方にかけて同筆に

生死二法 一心妙用

有無二道 圓融眞徳

心本周遍 无有去來

亦無生死 無相湛然

維時永祿甲子曆仲冬良辰

久遠第十五法嗣日敍誌焉

とあり、印文上は朱文「壽□」下は朱文重廓方印「日敍」である。

日敍(西紀一五二三——一五七七)は自記の如く身延山第十五代の山主にし
て、號寶藏院、日鏡に繼いで十九年間寺務にあり、永祿甲子(七年)は四十一

歳に當る。「郭波斯迦」は優婆夷の本字であり、「壽位」によつて生前の像たることを知るが、惜むらくは妙然の何人なるかについて明徴を得ない。唯永祿七年(西紀一五六四)の贊文は近世の顯著なる婦人の肖像畫のうち最も古き天文廿二年(西紀一五五三)の武田信虎夫人像(山梨縣長禪寺藏)に遲るゝ僅かに十一年である。

俗體にして小袖の上に腰卷を纏ふ。手に珠數と經卷とを持てるは歸依像の通常の形式であるが、腰卷は僅かに淺井長政夫人像(高野山持明院藏)等に類例を求むべく、足利中期頃より武家の上臈女房達の表立ちたる時に着用したるものと云へば相當の武家の夫人たることを語つてゐる。文様は小袖、腰卷共に片身替りにして、金銀泥と墨とを用ひて小袖には赤地に葡萄唐草、黄地に貝盡し、腰卷には白地に桐と梅鉢唐草とを描く。徳川中期以降武家の葡萄の文様を嫌へる風は當時には起つてゐなかつたのであらう。額に濃く白粉を施すことは屢例を見るが、更に角様のものを描けるは珍らしく、生下りを頬に垂れたるも恐らく當時の化粧法であらう。

描法は顔手足等は赭塗りに朱墨を用ひ、衣文は焦墨を以て描起せるものである。婦人像としては最も寫生的にして、顴骨の秀でたるは妙法華寺日蓮上人說法圖中の婦人像に相通ひて戰國婦人らしき面影を示し、顔面の細かき皺、個性的なる眉目の形などよく精采を傳へて壽像たるを肯かしめる。衣文の描線は勁味ある一種の特色を持ち、多少整備せざる趣はあるが的確なる實體感を表現してゐる。總じて極めて質實なる手法の中に、なほ體をやゝ斜前方に乗り出して運動を含める瞬間を捕へ、また小袖に隈を用ひ、腰卷には之を省いて畫法の變化を與へたるなど作者の深き用意を窺はしめてゐる。疊以外には補筆なく、紙面の蟲骨の具合は蒲生氏郷像(福島縣西光寺藏)に甚だ近い。淀君が父母の追福のために持明院に寄進せる淺井長政夫人像が、壽像ではないにせよ餘程固く、

形式的であるに對し、この像が著しく寫生的にして質實なるを見れば、恐らく地方的の製作であり、また贊文に仲冬とありながら腰巻は主として夏の服制であるから、豫めこの繪を作つて身延參詣又は日叙の巡錫の際に題贊を求めたものと想像される。表装は後の補改を経てゐるが、軸端は鍍金に菊花を刻めるもので、或は當初の儘である。

傳來亦不明であり、最近偶然の機會に脇本氏によつて發見せられた。近世の最も古き婦人像の一であり、從來他に公表せられたることなき風俗史及び美術史上の好資料として此處に掲げたのである（半子）

七、俵屋宗達筆 檜櫓圖 金澤 山川庄太郎氏藏

六曲屏 一隻 堅 九五・五種 横 二二四種

在來宗達或は傳宗達として諸家の著録に收められた作品は相當の數に達してゐる。それ等の作品中には「法橋宗達」と落款した作品、たとへば醍醐寺藏舞樂圖屏風や岩崎小彌太氏藏源氏圖屏風等があり、何れも濃麗な賦彩の作品でこれこそ彼の標準的作品と考へられるが、別に「宗達法橋」と法橋位を畫名の下に加へて落款せる作品の多數がある。それ等の作品中には特に水墨を以て揮寫された簡素な人物花卉其の他の圖様が多いが、其の大部分は容易く彼の正筆と考へ難い程の作品である。この事實は筆者にとつて宗達作品の整理に關して常に大きな疑問を投じてゐる。其の上かく法橋位を人名の下に加へて某法橋と稱することは三人稱としては吾妻鏡以來屢、其の遺例を見るが、一人稱的に自署するものとしては他に其の例を見ないことも、常に筆者の疑問を加重する結果となつてゐる。無論、彼の正筆として何人も異論の餘地なき津輕家傳來の源氏關屋圖屏風（熊谷直之氏藏）に所謂「宗達法橋」と落款せる作品のあることを思ふと、此の疑問は自らまた其の陰影を薄くするが、然し少くとも此の落款を有せる多數の水墨作品の品定に資すべき標準的な作品、云はゞ「法橋宗達」の落款を有せる水墨作品の有無は筆者にとつて、宗達畫の整理に關する一の重點

を成すものと考へられてゐた。

然しここに掲ぐる一圖は正しく「法橋宗達」の落款を有し、而も他に其の遺品を見ない水墨の作品として新に發見された彼の一畫蹟で、多少這般の消息を語るに足る重要な一資料とすることが出来る。

圖は見るが如く六曲の素屏に金箔霰地を撒き、上部に銀砂子にノゲを交へて霞形を置いた屏面の中央に三株の檜を描き、是れに檜を配した簡單な圖様で、水墨を主として僅に藍墨を加へ、細部には宗達一流のたらし込みの手法を用ひた以外には何の奇趣もないが、檜の枝葉の描法には凡手の及び難い程非常に軟かな暢達せる手筆を示し、檜の簡素な表現と共に實に閑雅冲淡の圖様を組み立てゝゐる。恐らく畫人は靜かな後庭の一角に露を含んだ朝あけの情趣を寫したものであらう。畫面の大部分に餘白をおいた構圖は、稍光琳畫中のものとも思はれる程巧緻を盡してゐるが飽くまで閑寂な空間の廣がりを表はしてゐる。

落款は挿圖に見るが如く法橋宗達とあり、是れに直徑凡六十五種の對青軒小

圓印を押捺せるもので、書風は岩崎家藏、源氏物語、濔標、關屋圖屏風に最も近く、特に宗字に於ける示字の縦畫を上に通して、稍右に抑へて引いてゐる筆法に於て特長を有してゐる。そして其の印影は上記の如く對青軒小圓印を用ひ、